

じました。

夜は身の回り所持品、軍服類に氏名書き、一週間程は練兵場において敬礼練習。十五日に新たな入営者を迎え、同年兵が多くなり翌日宇品港出航―釜山上陸―鮮満国境通過―牡丹江省伊林着も一面雪、広大な雪景色を部隊歌を唱えながら部隊のある丘地まで行進し、戦車八師団工兵隊配属、軍務に服しました。

## 二、抑留中の出来事

伐採作業は日本人特有の要領本分で何とかノルマを達成して、ノルマ定食を食べることができました。

貨車の積み降ろし作業はごまかしがきかない、これには正直言って降参しました。五十時間ぶっ続けで木材の積載作業をしたことがあります、本当にもう死ぬかと思いました。

その当時のことですが、トラックの運転手にノモンハンの捕虜だったという日本人と出会ったことがあります。もう帰化して子供もいるとのことですが、今その人がどうしているか心配です。もう少し細かい話を聞きたかったけれども、看視兵が警戒しているのでそ

れ以上は聞けませんでした。

平成二（一九九〇）年、初めての財団のシベリア慰霊訪問に参加して墓参をしてきましたが、その時は訪問地が限定していたため、私たちの抑留地へは行けませんでした。もう一度スイソエフカ付近へ行ってみたいと念願しております。

現在は地域の老人会の役員として永年奉仕をしております。全抑協へも結成以来の役員で各事業に積極的に参加、少しでも役に立つように一生懸命努力をしております。

## 半世紀前の思い出

愛知県 三浦 鎌 市

人生は暗いトンネルを手探りで進んで行くようなものである。特に軍隊においては不思議な縁で会ったり離れたりするものであった。

昭和十七（一九四二）年四月十日大阪市に集合、満

州に渡り、当時の牡丹江省のソ満国境の街東寧の万鹿溝に駐留していた砲兵情報連隊（通称満州第四十一部隊）に入営した。同年十月に満州から千葉県の野砲兵学校に入り、昭和十八年四月に同校を卒業し、すぐ同じ千葉県の電探教育学校に入り、同年七月に卒業し満州の原隊に戻り、間もなくの九月十二日、北海道の北部航空情報隊（通称第九五七四部隊）への転属命令を受け赴任した。

昭和十九年八月に千島列島の中程にある得撫島ウルシトに派遣を命ぜられ、勤務中の昭和二十年八月十五日に終戦となった。

得撫島ではソ連軍との戦闘はなかったが、上陸して来たソ連軍に武装解除されて、得撫島からソ連船に乗せられ北に向かって進んだ。

初めは北海道を左に見て進行しているうちに右に樺太を見て進み、シベリアのワニノに着いてここで下船し、辛くて苦しい地獄のような抑留生活が始まったのである。

今まで感じたことのない酷寒のシベリアの冬を夏服

のまま越し、生命を保持するためにはこの酷寒の地で暮らしているソ連人の様々な生活の様子を見て学んだ。例えば野菜等が全くないシベリアの冬にビタミンCを補給するためにシベリアに自生している樅もみの木の葉を飯盒で低温で煮てその汁を飲むことや、凍傷になったときの手当ての方法を教わった。

昭和二十一年四月に第九五七四部隊の戦友と別れて、ポートワニノで集合した集団の一員となった。同年五月前にいたラーゲルの横を通り停留所から汽車に乗せられ、コムソモリスク、ハバロフスク、イルクーツクを経由してウラル山脈を越えて、モスコイの近くのマルシャンスク市へ出発してから三十六日かかって到着した。同市は人口約十万人位の都市で、その郊外のラーゲルに収容された。満州、樺太、千島から連行されて来た日本人が約一万人位と、若干の外国人で拘束された人たちがいた。シベリアでの抑留者は日本人とドイツ人だけであったが、マルシャンスクにはドイツ、イタリア、トルコ、ルーマニア、ハンガリー及びチェコスロバキアの人たちが抑留されてい

た。まだ他の国の人たちもいたかもしれない。

ラーゲルには約一万人以上の人がいたが大部分が日本人で、日本人以外の国の人は僅かで、その仕事はラーゲルの衛兵、作業係、倉庫係等で何らかの役職についていた。これらの人たちも寝る時はラーゲル内の国別に分かれた棟で起居していた。この地での異色は、ラトビアの二十歳から三十歳位の女性集団が約百五十人位おり、ラーゲルの中に鉄条網で区切った特別棟に住んでいて、生まれたばかりから五歳位までの子供を育てながら別扱いを受けて異様な生活をしていった。

ラーゲルには専用の畑があり、ジャガイモを掘りに行ったことがあったが、北海道の畑と比べものにならないほど広く、敵が約一キロメートル以上あったが、掘る芋はほとんど小さな芋であった。このラーゲルでノモンハン事件のとき捕虜となった数人の日本人と樺太から連行された数十人の朝鮮人と会ったことがあったが、これらの人たちもソ連の忠政のために苦しめられていた人たちと思うが、その後のことについては分

からない。

ラーゲルの中から約三百人位の者が薪用材作りに森林に入り、落葉松を約五メートル位の長さに切り、この木材を筏に組んで数人乗り込んで二、三月かけてボルガ川を約百キロメートル位下り、ラーゲルの横まで運んでいた。

薪作りの中から寺沢隊長が長となって十三人がアルコール工場で働くこととなった。アルコール工場には約三百人位の従業員が働いていたが、男性が約三十人位で後は女性であったので、男性が足りなくて日本人を働かせたものと思った。作業は泥炭掘りと運搬、アルコールを造る原料の運搬、小型発電機の整備、ポイラーの灰取り等の作業であったが、日本人の律儀さと器用さが工場の人たちに好感を持たれて可愛がられた。他の作業のように自動小銃を持った監視兵がいなかったので気分的に解放された気持ちになった。

工場で造られるアルコールは、小麦、大麦、ジャガイモなどを原料としてウォッカの原酒となるものを造っていた。十三人の日本人はまじめに作業をするの

でアルコールの原酒をたくさん支給してくれた。また製品のアルコールを時々水筒にいっぱい入れてくれることもあり、このアルコールを水で二、三倍に薄めて十三人の晩酌であった。工場で働くロシア人たちは毎週土曜日の夕食後広場に集まって、手風琴の伴奏で歌を歌いダンスに興じていたが、我々の評判がよくになるとロシア人の子供が迎えに来てくれ、仲間に入れて楽しんでくれた。

昭和二十二年十月にラーゲルからダモイのため集合せよとの連絡があったので、翌朝工場長に挨拶してから工場のトラックでラーゲルまで送ってもらった。この時手の空いていた工場の人たちが大勢来て送ってくれた。

得撫島から日本に帰ると騙されてソ連に連れ込まれて抑留されてきたので、マルシヤンスク市の駅で汽車に乗せられ汽車がシベリア鉄道を東上していても、また騙されてどこかのラーゲルに移動されると思って来た。

昭和二十二年十月二十九日に出発して、三十二日か

かり同年十二月一日午前四時頃にウラジオストックより東方のナホトカ港に到着した。ここで初めて今度は嘘でなく本当に日本に帰れるんだと思った。後で分かったことだが、同年十一月三十日午後十二時にナホトカに到着しておればナホトカ港に来ていた復員船に乗船できたのに、ナホトカへの到着が四時間遅れたため乗船できなかったと聞いたが、乗り遅れた不幸者と、それと引き替えに急遽乗船して帰国できた幸せ者との明暗を分ける出来事であった。

四時間遅れのため帰国できなかった私たちはナホトカで冬を過ごしたが、帰国するまでの間、共産主義教養の総仕上げのため徹底的に教育され、アクチブの人達におだてられたので、あたかも共産主義者になったような態度で毎日を送ってきたが、昭和二十三年三月中旬の朝の点呼の時、仲間から二十人が呼び出されてどこかに連行されて行った。おそらく共産主義になじまない者、いわゆる反動分子として再び奥地のラーゲルに送り込まれたもので、この人たちは同年五月二日の帰国船には乗船されなかった。

ナホトカで帰国を待っている間に、ナホトカ港の近くの丘にある日本人抑留者の墓地の掃除に行ったことがあった。シベリア各地の地獄のようなラーゲルでの生活を生き抜き、日本に海を通じてつながっているナホトカまでたどり着き、迎えに来た船に乗れば両親、妻子等の家族の待っている日本、夢にまで見た日本に帰れるのに帰国船に乗ることができず、日本に帰って行く戦友に乗せた船の汽笛を聞きながら死んでいった戦友のことを思うと、何と言って手を合わせればよいかと迷ったものであった。

五月のナホトカには雪が残っていたが、船上から見る五月の祖国日本の若葉の美しさは、日本に帰れたという喜びと重なって、言葉では現すことのできない日本国の美しさであった。

検疫と上陸手続きのため舞鶴港に停船した時、迎える船から六段の調べを奏でる琴の音が聞こえて来ると、日本に帰り着いたという喜びで沸き返っていた船の甲板が静かになり、しばらく祖国日本の懐かしい音楽に聞き惚れて、確実に帰国できたという実感がして

きた。

舞鶴で帰国手続きを終えて帰省列車に乗り込み、故郷の名古屋駅に着いたのは昭和二十三年五月十日午前四時頃だった。汽車から降りる復員者数は十人位であったが、迎えの人は多くおり、このように出迎えてもらえることの慶びを感じた。

帰りきて 出直し人生の第一歩

シベリアは 生きている限り忘れ得ず

シベリアの 怒りをこらえて生きている

シベリアの 墓参のテレビ今日もまた

## 一青年の軍歴と抑留記

愛知県 天野 春吉

愛知県安城市で生まれる。八歳の折、一家は父親の都合で名古屋市北区に転居した。家業は薬局であった。生活は裕福の方であったが私は家を継ぐのが嫌